

ギリエルミ・ヂ・アウメイダに関する覚書

——1937年のハイカイ論「Meus haikais 余の俳諧」 発表の前後を探る——

スエナガ エウニセ

はじめに

ギリエルミ・ヂ・アウメイダ (Guilherme de Almeida, 1890–1969) はブラジルで20世紀初頭から半ばにかけて大きな人気を博し、1937年に独自のハイカイ論を発表し、ブラジルで俳句の普及に大きく貢献した詩人である。

増田 (1986) が指摘するように、ポルトガル語でハイカイを翻訳・紹介し、実際に書いたのはアウメイダが最初ではないが、1922年の近代芸術週間をオズヴァルヂ・ヂ・アンドラーヂやマリオ・ヂ・アンドラーヂらと企画し、1930年にブラジル文学翰林院の会員に選出されたアウメイダは当時もっとも人気のある詩人の一人だったので、同国において俳句の普及にもっとも貢献した一人であるということは疑いが無い。

本稿では、アウメイダが新聞等で発表した日本人や日本人街、そして日本の詩歌等についてのエッセイを考察し、どのように俳句に興味をもつに至ったかを考える。またアウメイダが有名なハイカイ論を執筆する前に、サンパウロ市内の日本人の句会に参加したことが分かっているが、その日時や様子が明らかになっていなかったため、ブラジルの当時の邦字新聞等を調査し、発見した資料を紹介する。次にアウメイダのハイカイ論を簡単に紹介し、アウメイダを句会に案内した当時のサンパウロ総領事市毛孝三や妻とのその後の交流についても触れる。そして最後に、1950年代、アウメイダが『サンパウロ四百年祭』によせた文章や日伯文化普及会主催の祝賀会で述べた挨拶等から、日本や俳句への思いを考察する。

アウメイダの日本での紹介については、1934年から1937年までにサンパウ

ロ総領事を務め、アウメイダとも親交のあった市毛孝三（俳号は暁雪）が1937年に俳句雑誌『ホトトギス』（第四十巻第十一号）に、アウメイダの簡単な紹介とともに、1937年2月に発表されたアウメイダのハイカイ論「余の俳諧」の抄訳を載せている。増田（1986）はブラジルにおける俳句の受容を紹介するエッセイで、アウメイダのハイカイ論も紹介し、トイダ（1999）はアウメイダのハイカイ論とハイカイを翻訳紹介するが、いずれもアウメイダがハイカイ論を書く前に書いたテキストや参加した句会等についての言及はない。

1. アウメイダの略歴

まずはアウメイダの経歴を簡単に紹介する。アウメイダはサンパウロ州の都市カンピーナス市に生まれ、サンパウロ大学法学部を卒業し、弁護士として勤務した後、1916年からブラジルの有力紙『オ・エスタード・デ・サンパウロ』（『エスタード』）にコラムやエッセイを執筆するようになる（Sperber 2002）。1937年に発表されたアウメイダの有名なハイカイ論は『エスタード』紙に掲載されているし、それ以前からアウメイダは同紙で日本の詩や日本に関するエッセイを発表している。

1917年に最初の詩集『Nós 私たち』を発表してから、アウメイダは一躍人気詩人になる。1922年にはオズヴァルヂ・ヂ・アンドラーヂやマリオ・ヂ・アンドラーヂらと近代芸術週間を企画し、1930年にブラジル文学翰林院の会員に選出される。1932年にはサンパウロの反乱（護憲革命）で志願兵として戦い、捕えられ、約一年間ポルトガルに亡命する。1937年2月に独自のハイカイ論を発表し、俳句の普及に大きく貢献する。1952年には、1954年のサンパウロ市四百年祭の祭典委員会総裁に選ばれている。この四百年祭の折に各国移民に協力要請があり、日本人移民は日本人協力会を組織し、日本政府の協力を得ながらイビラプエーラ公園に日本館を建てている。四百年祭が終わった後、戦後の混乱期を経てせっかくまとまった日本人の組織を解散させるのは惜しいという声があがり、その協力会を母胎として1955年にサンパウロ日本文化協会が、1956年に日伯文化普及会が設立され、アウメイダが後者の初代会長に選ばれる。1959年7月には、ブラジルを訪問中の岸信介首相より勲二等瑞宝

章が贈られている。そして同年9月には、マヌエウ・バンデイラ、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂ、ヴィニシウス・ヂ・モライス等、いまでは彼よりも名が知られている詩人を差し置いて、ブラジルの「プリンス詩人」に選ばれている。

ブラジル文学史の中でアウメイダの作品は近代主義に位置付けられる¹⁾が、初期の作品は高踏派の影響が色濃く、アウメイダはオズヴァルヂ・ヂ・アンドラーヂやマリオ・ヂ・アンドラーヂのようにラジカルではなく、モダニストの中でもっともロマンチストであった (Vogt 2001)。

アウメイダはまた翻訳者としても高く評価され、フランス詩人の詩集『Poetas da França』(1936年)、ボードレール『悪の華』(1944年)、サルトル『出口なし』(1950年)、ソフォクレス『アンティゴネ』(1952年)、ジャン・コクトー『オルフェ』(1965年)、オスカー・ワイルド『真面目が肝心』(1965年)等多数の訳書がある。

2. アウメイダのテキストに見られる「日本」

本節では、主に新聞のエッセイ等に見られるアウメイダの「日本」や「日本人」像を考察し、1920年代以前のテキストに見られる「日本」や「日本人」像と1930年代以降のそれは異なるということを確認する。なお、『エスタード』紙の日本や日本の詩歌に関するエッセイの多くはBarrosほか(2010)に紹介されている²⁾。

Barrosほか(2010)は1915年にアウメイダが、友人のオズヴァルヂ・ヂ・アンドラーヂが発行する『オ・ピハーリョ』誌に発表した「A Japonesa 日本女性」という十四行詩を引用しているが、そこにはステレオタイプ化された日本

1) 田所・伊藤(2000)によるブラジル文学史の流れは次の通りである。起源(1500-1601)、バロック主義(1601-1768)、アルカディズム(1768-1836)、ロマン主義(1836-1881)、写実主義・自然主義・高踏主義(1881-1902)、象徴主義(1893-1902)、前近代主義(1902-1922)、近代主義(1922-現在)。アウメイダは近代主義の幕開けとなった近代芸術週間をオズヴァルヂ・ヂ・アンドラーヂやマリオ・ヂ・アンドラーヂらと企画したのである。

2) 『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙のアーカイブはインターネットで公開されている <https://acervo.estadao.com.br/> (閲覧日:2021年11月1日)。

女性が描かれている。「芸者、東京の可憐な花/細い着物をまとい/絹と象牙でうぬぼれて高慢な/好物のお茶を飲む/太陽の娘は/まるで磁器の装飾品のようだ」³⁾。

1927年12月8日の『エスタード』紙の日本映画についての評論(「Made in Japan」)では、自ら偏見に満ちていると認める日本のイメージ「扇、提灯、掛物、屏風、磁器等の洗練された姿。風に揺れる田んぼから飛び立つ小鳥の浮世絵、ゆったりと流れる小川、日に照らされて飛び跳ねる鯉を描く北斎の絵(…)」を列挙した後、「しかし今の日本はこうではない。アメリカ映画は小さい足と細い目の美しい黄色い国を侵し腐敗させた(…)」と嘆き、アメリカナイズされた日本映画を嘆く。そして「ブラジルと言えば、これまで通り、映画的にも地理的にも日本の正反対である」と締めくくる。

1929年3月17日の『エスタード』紙には、サンパウロ市の日本人街リベルダージについてのエッセイ(「Bazar de Bonecas 人形のバザー」)が掲載される。そこでは日本人はみんな小さいということが繰り返され、まるで人形のお店に紛れ込んだようだという。「サンパウロの日本は小さい、小っちゃい、とても小さい。すべての日本がそうであるように。(…)あの数千年もある庭の数百年の頑丈で曲がった小さな松のように。(…)歩道を歩く小さな子どもの膝のような体、雨と民族性に浸された光沢のあるまっすぐで固い髪、(…)人形だ。足早に歩く小さな女性も(…)人形だ。ゴムの雨合羽を着た小さな男性も(…)人形だ」と、日本人は子どもも成人女性も成人男性も人形のようにちっちゃい、日本や日本人はみんな小さいということが繰り返される。

このように1910年代と1920年代にアウメイダが発表した日本や日本人に関する記述には、書籍から得られた知識「芸者」「着物」「鯉」「浮世」などの言葉がちりばめられ、ブラジルに住む日本人や日系人については小さいということが強調されている等、日本や日本人についての表層的な記述が目立つ。しかしこれから見ていくように、1930年代に入ると、日本の詩歌を自ら翻訳紹介するようになっていく。

3) 訳は引用者による。ことわりがない限り、以下同様。

1933年9月15日と16日、そして1935年1月11日の『エスタード』紙には、「Canções de Geishas 芸者の唄」と題するエッセイでフランス語からの重訳だと断りながら、いくつかの詩歌が紹介されている。「とても難しく、よってとてつもなく楽しい試みをしてみよう。ここにフランス語訳されフランス語のコメント付きの日本のテキストがある。それは古い、民俗芸能とも呼ばれる芸者の唄である。それらをポルトガル語にしようと思う。(…) これらの芸者の唄は、私にとって、世界でもっとも純粋に詩的な国のもっとも純粋な歌である。三十一文字だと決まっている短歌のような洗練された厳格さはない、また十七文字の中で拷問される俳諧の賢明な制作作業もない。吉原に囚われた身の小さな娘たちの想像のように自由である、また女房の恋のように自由である。日本では広く知られており、三味線に合わせて歌われる」。このように、「世界でもっとも純粋に詩的な国のもっとも純粋な歌」というような日本や日本の詩歌への憧れとでも呼べるような記述の後、芸者の唄がいくつか翻訳紹介される。

アウメイダはフランス語訳された唄だと紹介するだけで出典を明かしていないが、1926年にフランスで出版されたスタイニルベル＝オーベルラン、岩村英武共訳『シャンソン・デ・ゲイシャ』(藤田嗣治挿絵)からの重訳だと思われる。下記の表の左の欄にはアウメイダのポルトガル語訳を、右の欄にはその出典と思われる『シャンソン・デ・ゲイシャ』に載っている唄を載せる。なおアウメイダが紹介する唄は1933年9月16日と1935年1月11日のエッセイ合わせて9つである(9月15日のエッセイでは説明紹介だけである)。

「芸者の歌」のアウメイダ訳(『エスタード』紙1933年9月16日掲載)

DEPOIS QUE TE CONHECI
Ah! que é dos meus pensamentos
até que te conheci?
É simples: antes de ti,
eu não tinha pensamentos...

DEPUIS QUE JE T'AI CONNU⁴⁾
Que sont devenues mes pensées
depuis que je t'ai connu?
C'est bien simple:
avant toi, je n'avais pas de pensées!...

4) 『シャンソン・デ・ゲイシャ』28ページ。

NA FESTA DE KAMO

Na festa de Kamo,
pus nos cabelos um ramo
de rosas silvestres. E ele
não voltou mais.
Espero...
Oh! o passado: aquele
tempo que coleciona
dias iguais,
dias iguais...

UM ESPELHO

Longe de ti,
contemplo a noite doce,
o céu e a lua,
longamente.
Que bom se a lua fosse
um espelho: o teu espelho, simplesmente!

A LA FÊTE DE KAMO⁵⁾

A la fête de Kamo,
j'avais mis des roses trémières
dans ma chevelure...
Il n'est pas revenu.
J'attends...
Oh! le passé!
le temps où se sont accumulés
les jours lents!
les jours lents!

UN MIROIR⁶⁾

Séparée de toi,
je contemple, la nuit,
le ciel longuement
et la lune.
Quel délice si la lune
devenait ton miroir!...

「あなたと知り合ったあと」「賀茂祭で」「鏡」と題名がつく三つの唄のアウメイダ訳（左側）と、『シャンソン・デ・ゲイシャ』のフランス語訳（右側）を載せたが、おおむね一致しているだろう。

このように、これまではステレオタイプ化された、もしくは表層的な日本や日本人について書いてきたアウメイダが、「もっとも純粋に詩的な国」などと日本への憧れや尊敬を表明し、詩歌を訳すようになっているのである。1920年代から1930年代のあいだに何が起こったかを考えると、1932年から1933年8月まで約1年間、アウメイダはポルトガルに亡命していたという事実が確認される（Barros ほか 2010）。アウメイダはポルトガルで「ポルトガル語の偉大な詩人」、そして革命の英雄として迎えられ（Vogt 2001）、フランスも訪問したという。アウメイダはヨーロッパ、とくにフランスで日本の詩に触れ、日本の詩に興味をもつようになったのではないだろうか。

1936年7月21日の『エスタード』紙には「Poesia japonesa 日本の詩」と題す

5) 『シャンソン・デ・ゲイシャ』39ページ。

6) 『シャンソン・デ・ゲイシャ』43ページ。

るエッセイが掲載される。「非常に小さな芸術である、日本の詩とは。小さい要素からなるが、目に見えない大きな広い意義が隠されている。ジョルジュ・ボノーによって西洋に紹介された（…）非常に小さく先験的な芸術である。すべてが小さいが大きなインパクトを及ぼす。一口の酒、一つまみのお香、一つの接吻のように…」と述べられた後、都都逸、短歌、そして俳句の説明がある。ここでは日本の詩は小さいが、その中に大きな意義が秘められている、「一口の酒、一つまみのお香、一つの接吻のように」大きなインパクトがあるという、つまり、これまででは日本のものや日本人は小さいということが特に強調されてきたが、ここでアウメイダは小さい日本の詩の中に秘められた大きな意義を認めるに至っているのである。

アウメイダはこのエッセイで芭蕉の俳句3句、都都逸1句、現代短歌1句を紹介する。ここでも出典は明らかにされていないが、エッセイの中でも触れられているジョルジュ・ボノー編の『Anthologie de la poésie japonaise 日本詩歌選集』（グートネル社、1935年）であると思われる⁷⁾。下記の表の左の欄にアウメイダ訳、中央の欄に『日本詩歌選集』のフランス語訳、そして右の欄に元となった日本語の原文を載せる。『日本詩歌選集』で特徴的なのは、見開きで左のページに日本語原文のローマ字が掲載されていること、そして俳句や短歌等すべての作品にタイトルがついているということである。

Solidão	SOLITUDE ⁸⁾	
Sobre o tanque morto	Sur l'étang mort,	古池や蛙飛こむ水のおと
O ruído de uma rã	Um bruit de grenouille	(芭蕉)
Que mergulha.	Qui plonge.	
Outono	AUTOMNE ⁹⁾	
Morto o galho:	Morte, la branche;	かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮
Pousado o corvo;	Posé le corbeau:	(芭蕉)
Noite de outono...	Soir d'automne!	

7) 2018年筆者がサンパウロ市内のアウメイダ資料館を訪れた折、ジョルジュ・ボノー編『Anthologie de la poésie japonaise』を蔵書の中に確認している。

8) 『日本詩歌選集』143ページ。

9) 『日本詩歌選集』147ページ。

	AME ¹⁰⁾	
Sobre os cravos,	Dans les œillets,	撫子に蝶々白し誰の魂 (子規)
Essa borboleta branca:	Ce papillon blanc:	
Uma alma?...	Une âme?	

	LE BOITEUX ¹¹⁾	
Vede: no Oeste, sobre a montanha,	A l'ouest, sur la montagne, voyez,	西の山見や
Um coxo passa.	Il y a un boiteux qui passe:	ちんばが通る
Seu chapéu ora aparece, ora	Son chapeau tantôt paraît, tantôt	笠が見えたり
Desaparece...	Disparaît!	かくれたり ¹²⁾

	JEU ¹³⁾	
Por brinquedo,	Par jeu, j'avais	たはむれに母を背負ひ
Carreguei mamãe sobre os meus ombros.	Pris ma mère sur mes épaules:	てそのあまり軽きに泣
Mas ao sentir	Mais à sentir	きて三步あゆまず (啄
Esse peso tão leve, chorei,	Ce poids trop faible, j'ai pleuré,	木)
Sem nem sequer poder dar três passos...	Sans pouvoir même aller trois pas.	

このように、アウメイダは芭蕉の「古池や蛙飛こむ水のおと」「かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮」、芭蕉の句だと紹介されているが、実は子規の「撫子に蝶々白し誰の魂」、作者不明の都都逸「西の山見や/ちんばが通る/笠が見えたり/かくれたり」と石川啄木の短歌「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」を翻訳紹介しているのである。元となったフランス語を踏襲してだと思われるが、芭蕉の「古池や」と「かれ朶に」の句にそれぞれ「孤独」と「秋」というタイトルがつけられている。

ジョルジュ・ボノー編の『日本詩歌選集』は1935年にフランスで出版されているが、その一部が1936年7月にブラジルでアウメイダによって翻訳紹介

10) 『日本詩歌選集』175ページ。

11) 『日本詩歌選集』11ページ。

12) マブソン (2003) は次の出典を指摘する。「『日本歌謡類聚』美濃国 海西郡 高須町 遊戯唄 p. 487. 『諸国俚謡傑作集』伊勢国雑謡 p. 42. 『日本歌謡集成』三重県 四日市市 雑謡 地方特有歌 p. 292 (ただし下五に「みえんだり」とある)。」

13) 『日本詩歌選集』125ページ。

されているのである。

3. 市毛孝三（暁雪）との交流、句会参加について

前節では、アウメイダが1937年にハイカイ論を発表する前のエッセイ等に見られる変遷をたどってみた。そこで、ポルトガル亡命から帰国した直後に初めて日本の詩（芸者の唄）をフランス語訳を元に翻訳発表していること、そしてハイカイ論を発表する約半年前に俳句3句や短歌等の「日本の詩」を翻訳紹介していることが確認できた。

本節ではアウメイダと1930年代にサンパウロ総領事だった市毛孝三（俳号は暁雪）との交流について考察し、またアウメイダが市毛の紹介で見学したという句会の日時や様子を当時の邦字新聞からたどってみる。

市毛は1934年から1937年までのあいだサンパウロ総領事を務め、木村圭石らと三水会という句会をサンパウロで開催し、俳句雑誌『南十字星』の創刊にも関わっている（細川 2012）。1937年に市毛は『ホトトギス』（第四十巻第十一号）にアウメイダのハイカイ論「Os meus haikais 余の俳諧」の抄訳を載せるが、その折アウメイダの紹介を次のように書いている。「小生は二年以来の知合ですが、初め夜話会（当地交際社会の舞踏なしの夜会で重苦しくない講演を一人やるのです）で当人の講演を聴いた時から、他の詩人と違い人情よりも寧ろ自然を詠う傾向が強いと感じました、其後俳句の詩型に共鳴し句会の席にも傍聴に来ました」。

市毛の紹介で参加した句会について、アウメイダはそれから20年以上経った1958年6月20日、日本人のブラジル移民50周年を記念して三笠宮夫妻がブラジルを訪れていた折、『エスタード』紙に市毛を懐かしく思い出しながらその様子について語っている。

日本人に私はもっとも大きな感動はもっとも小さな詩におさまる——小さな一滴のしづくに無限の空がおさまるように——ということを教わった。
(…) 1936年、偉大なる詩人であり第二次世界大戦の英雄である市毛総領事（俳号は暁雪）に連れられ、日本クラブの花ゲーム（記者注：句会を指

す)に参加した。(…)そこには総領事以外に本売り、大工、家政婦、百姓等素朴な人たちが12人で、みな俳人であった。それは10月、我々の春で、先月伝えられたテーマは「春の風」だった。(…)選ばれた句の一つは、その作者がブラジルの現実に完全に溶け込んでいることを詩的に、郷愁をこめて表していた。作者はグロリア通りを渡る日系人の女の子が、軽い柔らかいカラフルな絹の着物ではなく、渋い制服を着ているのを見て、そしてその重いサージのプリーツスカートが風にいたずらされているのを見てその句を思いついたという。それを散文的に自由に訳してみよう。A saia de lã/da pequena colegial./Brisa de primavera (小さな女学生のウールのスカート春の風)。

アウメイダは句会に参加したのは1936年10月のことだったと書いている。しかし、今回著者が行った邦字新聞の調査で、アウメイダが参加したのは三水会の第10回句会(1936年9月16日開催)だったことが明らかになった。三水会第10回句会の記事が『聖州新報』1936年9月29日と10月6日(資料I)、そして『日伯新聞』1936年9月19日に載っていたのである。『聖州新報』の記事では、当日の兼題は「春風」と「朝寝」で、席題は「冴え返る」と「蒲公英」であったこと、そしてそれぞれ互選で選ばれた句があげられる。兼題で選ばれた句の一つに「制服の裾軽るげなり春の風」(芭川)があり、これをアウメイダがポルトガル語訳して『エスタード』紙に1958年、つまり句会が開催されてから22年後に紹介したのだと思われる。

『聖州新報』1936年10月6日の記事ではまた、アウメイダから「若^{ジュベントッデ}さ」という題の「新屋の赤い屋根に燕が巣を作って巣立った」という意味の詩を作ったので、これを俳句にしたらどうかという注文があり、これをもとに圭石が「赤屋根や燕巣立つ朝にして」、芭川が「新開地燕巣立つや屋根赤き」、暁雪が「燕の巣立つ朝なり屋根赤し」、素骨が「新屋の赤屋根後に若つばめ」という句をつくったとある。

『日伯新聞』1936年9月19日にも「珍客入来 伯国詩人がハイカイの道場見学 他流試合にバタ臭い一句を注文」という題で、アウメイダが句会を見学し

たことが書かれている。場所は日本クラブ、句会は夜の8時半から12時まで長時間続き、参加者は「圭石老始め暁雪、芭川夫妻、素骨、信山、其林、芳園その他十数人」とある。アウメイダの「新しい家、赤い屋根、そこに燕が巣喰って巣立ちした」という意味の詩を元につくられた俳句を列挙し、それらについて「若いには若いがどうも少々バタ臭い俳句ではありませんか」と評して記事が結ばれている。

筆者は2018年、サンパウロ市内にあるアウメイダ資料館を訪問した折、アウメイダ直筆の日付入りのハイカイのコピーを手にいれた（資料Ⅱ）。そこには1936年8月につくられたⅠからⅦの番号付きの7句が記載され、最初の句は8月13日につくられてる。その中に、1936年8月16日の「Mocidade（若さ）」というタイトルのついたⅦ番目の句「Do beiral da casa/(ó telhas novas, vermelhas!)/ Vai-se embora uma asa...（家のひさしから/（新しい赤い瓦!）/羽が飛び立つ）」がある。アウメイダ手書き原稿のタイトルの意味は同じ「若さ」でもポルトガル語は「Mocidade（モシダーヂ）」で、句会の記事の「ジュベンツデー」とは異なるが、この「Mocidade（若さ）」という題の句が句会でアウメイダから紹介されたのだと考えられる。つまりアウメイダは1936年7月21日に「日本の詩」というエッセイを『エスタード』紙に発表し、8月13日からハイカイを実際につくり始め、9月16日に市毛の紹介で参加した木村圭石ら主催の句会の折にその一句を披露し、集まっていた参加者にこれを翻案させたということだろう。そしてこの句会の様子を参考にして、翌年1937年2月に、独自のハイカイ論を『エスタード』紙に発表したのだと思われる。

Barros ほか（2010）はアウメイダがこの句会に参加した直後、市毛夫人に宛てた手紙の下書きを手に入れ、原文はフランス語のその手紙のポルトガル語訳を紹介する（資料Ⅲ）。その手紙でアウメイダは先日参加した句会の感動からまだ冷めないこと、また様々な俳句関連の書籍や資料を提供してくれた市毛夫人への感謝の言葉と共に、「日本の詩についての貴重な資料は、ちょうど私が全身全霊でポルトガル語の詩を「haikaizar ハイカイ化」（新語を失礼!）しようとする楽しい作業に取り組むときに届きました。もし私がこの作業を完了できたあかつきには、私の作品はマダム、貴女に大きな借りがあるということ

意味します」と書いている。アウメイダは自分のハイカイ論の展開やポルトガル語ハイカイをつくる試みを、ポルトガル語の詩を「haikaizar ハイカイ化」する試みだと捉えていたのである。

Barros ほか (2010) は、この手紙が書かれたのは1936年6月末で、アウメイダが取り組んでいるハイカイ論は『エスタード』紙に1936年7月に発表された「日本の詩」についてのエッセイを指すと推測するが、この推測は誤りだと思われる。今回の調査で明らかになったように、アウメイダが参加したのは1936年9月16日の句会なので、アウメイダが取り組んでいるハイカイ論は翌年2月に発表された「余の俳諧」だと思われる。また市毛夫人に宛てた手紙でアウメイダは市毛総領事に頼まれた PEN クラブのイベントに招待する知識人リストを同封すると言っているが、この PEN クラブイベントは同年9月末に行われたイベントを指すと思われる。

アウメイダは「余の俳諧」で「友人たる詩人市毛暁雪に」とハイカイ論を市毛総領事に捧げているし、その後日本関係のエッセイやイベントの挨拶等で市毛総領事の名を何度かあげているが、個人的には市毛夫人に対しても恩を感じていたようである¹⁴⁾。

4. アウメイダのハイカイ論及びその後の市毛との交流

1937年2月28日の『エスタード』紙に発表された「Os meus haikais 余の俳諧」でアウメイダは独自のハイカイ論を展開する。そこでは、「廿年の詩生活の後如何に複雑なる詩想と雖も十七音に盛り得ざるものなしとの静なる結論に達した。「鶉」、「星の声」其他余の十四行詩は何れも之を縮めて俳諧にしてもよかったのだと今にして思う、装飾と余計なものを捨てて真髄を残す勇氣の問題だけである」¹⁵⁾と、十四行詩の神髄は一つの俳句におさまると気付いたと述

14) 市毛孝三の妻マリー夫人について、栢野桂山『俳諧小史』（『ブラジル日本移民百年記念 人文研研究叢書 第4号 ブラジル日系コロニア文芸上巻』サンパウロ人文科学研究所 2006.5 pp. 153-227）「市毛暁雪——孝三」の項その他ブラジルの日本語資料で国籍はドイツとなっているが、Barros ほか (2010) で紹介されるマリー夫人がアウメイダに宛てた手紙や『人事興信録』第12版によると、国籍はフランスである。

15) 『ホトトギス』第四十巻第十一号 暁雪訳。「余の俳諧」に関しては以下同様。

べる。

アウメイダは続けて、高浜虚子は俳句は日本語以外の言語で書けないと言ったが、私はそうは思わない。ボノーが見出した日本語とフランス語との類似以上に、日本語とポルトガル語は似ていると指摘し、ブラジルの伝統詩や諺は5シラブルもしくは7シラブルのものが多いということのを例をあげながら紹介する。ガリシアで生まれたポルトガル語の伝統詩のレドンディーリャは5シラブルもしくは7シラブルである。諺は7シラブルであるし、中世の反復詩は7シラブルであった。ブラジルのセハニーニャ、パストラール、トライェーラ、童謡なども5シラブルである。ギリシアで生まれた詩に韻をつけたのはガリシアである、だから私は日本で生まれた小さな詩に我々の詩がもつ韻をつけるのだと主張する。アウメイダが考案したハイカイのルールとはタイトルがあること、三行であること、そして一行目と三行目の最後のシラブルと、二行目の第二と最後のシラブルが韻を踏むのである。

以下に『エスタード』紙に掲載されたアウメイダのポルトガル語ハイカイ(左)及び市毛暁雪訳(右)を引用する。

CARIDADE

Desfolha-se a rosa:
parece até que floresce
o chão cor-de-rosa

憐愍

薔薇の花弁が落ちる
地が薔薇色の
花と咲くまで

AQUELE DIA

Borboleta anil
que um louro alfinete de ouro
espeta em Abril.

かの日

青い蝶
黄金の針に留められて
秋の四月

HISTÓRIA DE ALGUMAS VIDAS

Noite. Um silvo no ar.
Ninguém, na estação. E o trem
passa sem parar.

或る人生の歴史

夜。汽笛の音。
無人の駅。
汽車は通過す

NÓS DOIS

Chão humilde. Então
riscou-o a sombra de um voo
“Sou céu!” – disse o chão.

愛する二人
地は卑下す
忽ちにて飛鳥の影引くや
曰く我は天なり

CONSOLAÇÃO

A noite chorou
a bolha em que, sobre a folha,
o sol despontou.

慰め
宵泣いていた
葉の上の泡の玉から
日が昇る

N. W.

Dilaceramentos.
Pois tem espinhos também
a rosa-dos-ventos

北西風
生温し。息苦し。
刺を有つてる
風の薔薇

QUIRIRI

Calor. Nos tapetes
tranquilos da noite, os grilos
fincam alfinetes.

蟋蟀
暑さ。夜の
静かな絨毯に蟋蟀が
留針を打込む

VELHICE

Uma folha morta.
Um galho no céu grisalho
Fecho a minha porta.

老
枯葉。
灰色の空の中の枯枝
われは吾家の門をとざす

O HAIKAI

Lava, escorre, agita
a areia. E enfim, na bateia,
fica uma pepita.

俳諧
洗うて流して振う砂
終りに鉢底
残る金塊

市毛は1937年11月にサンパウロを去っている。Barros ほか (2010) は市毛夫人がアウメイダに1950年に書いた長い長い手紙の一部を紹介している。その手紙の中で、市毛夫妻がサンパウロを去る際、アウメイダや友人たちがお別れ会を開き、その時アウメイダは市毛夫妻のブラジル滞在は「俳諧のように短かったが、俳諧のように意義深かった」と述べたということを市毛夫人は懐かしく思い出している。

市毛夫人は戦争の混乱でアウメイダの住所を逸してしまっただが、サンパウロ

の句会のメンバー宮坂氏を通してその住所を知り、12年の思いのたけを手紙に託したのだという。その手紙によると、市毛夫人がアウメイダから受け取った最後の手紙は1938年である。市毛夫人は1939年に市毛がプラハの総領事館勤務になり、船でヨーロッパに向かう途中に戦争が始まったこと、プラハでの出来事、1年後に日本に呼び戻されたこと、その後夫が外務省を辞め鐘紡に入社してフィリピンのマニラ勤務になったこと、マニラが敵軍に征服され、市毛は仲間と共にルソン島のジャングルに3カ月間潜伏した後、1945年3月17日に餓死したこと、若いがゆえに8月に収容所に送られるまでジャングルで生き延びた一人の俳人でもある若者によって夫の最期が伝えられたこと等を綴っている。夫人はまた若者の話として日本兵が民間人の降伏を許してくれなかったこと、日本兵は同じ日本人を殺して食べていたのでジャングルの獣より怖かったこと、ジャングルでの生活や収容所で市毛の形見はすべてなくしてしまったが、若者が暗記していた三句だけが唯一の形見だったことなどを詳しく語る。また自分が大事にしていたアウメイダの訳書（おそらく『Poeta da França フランスの詩人たち』を指す）を市毛がマニラに持って行ってしまったことを伝え、最後にその本は今頃市毛が眠るルソン島のジャングルの木陰にあるのではないのでしょうか、と結んでいる。

5. 1950年代——サンパウロ市四百年祭、日伯文化普及会設立そして瑞宝章授与

1952年にアウメイダは、1954年に設立四百年を迎えるサンパウロ市の四百年祭典委員会総裁に選ばれている。各国移民に協力の依頼があり、日本人移民も聖市四百年祭典日本人協力を組織し、日本国政府と協力し、イビラプエーラ公園に日本館を建てている。『サンパウロ四百年祭』（聖市四百年祭典日本人協力会 1957年）の冒頭の、「日本の参加——桂離宮」と題する挨拶でアウメイダは日本人移民、そして日本政府の協力で建てられた日本館について次のように述べる。（本文はポルトガル語と日本語併記）

地理的に正反対の立場にあり、年代的に遠く離れた日本とブラジルの、

相異なる二つの文明が、互に離れることなく、肩を並べて進展してゆく中に、サンパウロにおける日本移民の定着という、社会的、政治的並びに経済的の奇蹟を見出すことは、吾人の最も欣快とするところである。わが国運の進展に対する、最も新しく、かつ有効なる協力者たる日本移民が、サンパウロにおいて、好感をもって迎えられ、その定住が奨励されていることは、誠に社会的、政治的並びに経済的の一つの奇蹟である。

広大な高台に位するイビラプエーラ公園の静寂の中に、亭々として聳り立つユーカリ樹の繁みの蔭に、大気に腹膨らます鯉戯りを竿頭におよがせ、優美なる桂離宮風の日本館は、一つの俳諧の表わす崇高なる縮像の中に集約される、詩的内容のすべてをその中に秘めて、サンパウロ創設四百年記念祭への日本の参加を、今後数世紀に亘り、表徴してゆくであろう。

このようにアウメイダは桂離宮をイメージして建てられた日本館を、小さいながらも大きな意味を含む俳諧になぞらえ、四百年祭への日本の大きな参加を数世紀に亘り表徴してゆくだろうと結ぶのである。

聖市四百年祭典日本人協力は1955年1月16日に解散され、解散記念会は日本館で行われた。アウメイダ総裁は参加しなかったが、日本人に謝意を伝えるメッセージを託している。日本人移民が力を合わせ偉大な事業を成し遂げたことから、日本人協力が解散するのは惜しいという声があがり、協力を母胎に「日伯文化普及会」(Aliança Cultural Brasil Japão 通称アリアンサ)が1956年11月17日に発会し、アウメイダは初代会長に選ばれている。

アウメイダは1959年7月26日、ブラジルを訪問中の岸信介首相から、日本文化の普及への貢献により勲二等瑞宝章を授与されている。そして同年9月16日には、他の有名な詩人を差し置いてブラジルの「プリンス詩人」に選ばれている。また同年11月23日にはアウメイダが瑞宝章を授与されたこと及び「プリンス詩人」に選ばれたことを祝う祝賀会が日伯文化普及会の主催でイビラプエーラ公園の日本館で開催された。

1959年11月24日の『エスタード』紙には、この祝賀会についての記事及びアウメイダの挨拶全文が載っている。この挨拶でアウメイダは再び市毛との思

い出を語り、芭蕉の俳句を紹介し、日本人移民に対する敬意を表すために一つの俳句を披露している。

日本…日本人…出会ったのは旅行でも商売でも歴史や地理を勉強しながらでもない。ここ、サンパウロのリベルダージの屋根裏で23年前、詩のクラブ（訳者注：句会を指す）での詩作を見ながら日本と出会った。そこには偉大なる総領事で偉大なる詩人——市毛孝三——の気高い手によって導かれて行った。その花ゲームには12人の日本人詩人——慎ましい職業の素朴な人たち——が励んでいた。そこで私はなすものすべてに美の意義を与えようとするこの素晴らしい民族に出会った。彼らはありふれた花を活けるといふ家事を生け花という芸術に高め、お茶を飲みお茶をつぐといふありふれた習慣に宗教儀式のような意義を与え、「茶の湯」という神秘的な芸術にまで高めた（…）。

皆さんの招待を受けたとき、何を言うべきか考えた。（…）我々の環境に完璧に奇跡なまでもなじんでいる偉大なる人々との相互理解の驚異を説明するには、私の詩——ただしあなた方の型を使って——つまりハイカイの小さな飛翔以外にないと理解した。ハイカイによってのみ私の思い、あなた方への尊敬そしてあなた方がサンパウロにいらっしゃることへの感謝を表明できると。日系人女性がサンパウロ州の赤土の畑で働いている姿を通して。

A nissei que pôs,
no cafezal, seu chapéu
de palha de arroz.

1959年11月25日の『日伯毎日新聞』にはこの祝賀会を簡単に紹介する記事が載っている。そこではアウメイダが上記の句を発表後、「宮坂幾別春氏が、『珈琲植ゆみの笠をきて移民の子』と間髪入れず翻訳し喝采を得た」とある。

このように、アウメイダは俳句の普及に貢献しただけでなく、サンパウロ市四百年祭の祭典委員会総裁として日本人移民との関係を深め、日伯文化普及会

の初代会長に選ばれている。そしてこれら日本文化の普及への貢献が認められ、日本政府から勲二等瑞宝章を授与されているのである。サンパウロ市四百年祭の挨拶や日伯文化普及会の祝賀会の挨拶でも明らかなように、アウメイダにとって日本といえば俳句である。また市毛の紹介で句会に参加したのは1936年のことなので、1959年、23年経っても日本と言えば市毛が想起されているのである。

おわりに

本稿では主に新聞等に掲載されたギリエルミ・ヂ・アウメイダのエッセイ等から、アウメイダがハイカイ論を書くまでの経緯を考察した。そこで1920年代までは日本のステレオタイプ化された表層的な描写しかされなかったのが、1930年代に入ると日本に対する憧れや尊敬が語られるようになり、1933年にフランス語訳を元に日本の詩のポルトガル語訳を始めたことが明らかになった。また日本の詩の翻訳を始めたのはヨーロッパの亡命から帰国した直後であること、そして1933年及び1935年に翻訳紹介された「芸者の唄」や1936年7月に発表された「日本の詩」で翻訳紹介される俳句や短歌等のフランス語訳の出典が明らかになった。さらにアウメイダのエッセイをヒントに当時の邦字新聞を調査した結果、新たな資料が明らかになり、アウメイダが市毛孝三の紹介で参加した句会の日時及びその様子が確認できた。最後に、1950年代のアウメイダの日本に関するエッセイや挨拶等から、アウメイダは日本といえば俳句を想起し、20年以上経っても市毛のことを懐かしく思い出していることが確認できた。

今後の課題として、紙面の都合から詳しく分析できなかったアウメイダのハイカイ論やハイカイを詳しく分析すること、またアウメイダが参考にしたフランス語の文献に現れる俳句論や俳句と、アウメイダのそれとの違いを考察することである。

*引用文において旧仮名遣いを現代仮名遣いに、そしてポルトガル語旧正書法を新正書法に改めた。

参考文献

- 移民八十年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』（ブラジル日本文化協会 1991年）
- エレナ ヒサコ トイダ「ブラジルの俳人（ハイクイスト）ギリェルメ・デ・アルメイダ」（『Encontros lusófonos』1 1999年6月）
- 聖市四百年祭典日本人協力会『サンパウロ四百年祭』（1957年）
- 『人事興信録上』第12版（人事興信所 1949年）
- 増田秀一「ブラジルのハイカイ」（『俳句文学館紀要』4号 1986年7月）
- 細川周平「俳句——結社組織の移植」『日系ブラジル移民文学 1——日本語の長い旅〔歴史〕』（みすず書房 2012年）
- 田所清克・伊藤奈希砂『ブラジル文学事典』（彩流社 2000年）
- マブソン・ローラン「第二章ポール・クローデルの『日本短詩集』（*Pettis Poèmes japonais*）——共同的詩作の可能性」『俳諧の比較文学的考察——越境の詩学、一茶とクローデル』（早稲田大学大学院教育学研究科教科教育学専攻2003年度博士学位論文）
- BARROS, Frederico Ozanam Pessoa de; FRANCA NETO, Alípio Correia de; FRANCA, Sandra Mara. (2010). Viagem ao oriente mais do que próximo. In: BARROS, Frederico Ozanam Pessoa de et al. *Monografias: Guilherme de Almeida*. São Paulo: Aliança Cultural Brasil Japão.
- SPERBER, Suzi Frankl. (2002). Sons do silêncio: sendas da condensação. In: ALMEIDA, Guilherme de. *Encantamento Acaso Você*. Campinas: Editora Unicamp, pp. 11-49.
- STEINILBER-OBERLIN; IWAMURA, Hidetake (trad.). (1926). *Chansons des Geishas*. Paris: Éditions G. Crès & Cie.
- VOGT, Carlos. (2001). Um romântico entre futuristas. In: ALMEIDA, Guilherme de. *Melhores Poemas*. São Paulo: Global Editora, pp. 11-16.

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究(B)、課題番号（21H00520））の交付を受けて行った研究成果の一部であります。

資料編

資料I 三水会第十回句会 (1936年9月16日夜開催) 報告記事

『聖州新報』1936年9月29日

俳句 三水会第十回句会

九月十六日夜

兼題 春風 朝寝

互選句成績左の如し

四点句 五重

道中に風船売りや春の風

三点句 圭石

乳売りの山羊の声聞く朝

々 頭洲

散し行くシネマのピラや春の風

々 春磨

旅衣ぬぎたる儘の朝寝かな

々 さだめ

春風やふと匂ひくる炒り珈琲

々 暁雪

ユーカリの並木なびけり春の風

々 芭川

制服の裾軽るげなり春の風

二点句 頭洲

羽根布団じりし儘の朝寝かな

春風や戸毎に伯旗独立日

病よし春風受けて汽車の旅

々 さだめ

春風や若葉若葉のバナナ畑

久方の雨の音よき朝寝かな

々 信山

プロペラの音春風に消えて行く

々 素骨

朝寝して覚むれば蘭の活けてあり

々 蔓沙女

遠乗の一組行くや春の風

席題次号発表

『聖州新報』1936年10月6日

席題 冴え返る 蒲公英 ジャガランダ

三点 五重

冴返る芝生の上に煙る雨

々 春磨

芝草を刈る人よけし鼓草

々 信山

船発って埠頭の雨や冴返る

冴返る午後の競技や新記録

二点 芳園

蒲公英の咲きほゝけ居り里遠し

耕すや子は蒲公英にまぎれ居る

々 さだめ

冴返る夜をサボン焚く女かな

朝まだきトマテちぎりやさえ返る

々 暁雪

ジャガランダ咲く並木道女騎士

々 圭石

街路樹に太り過ぎたりジャガランダ

尚当夜は暁雪氏の案内で伯国新進詩人ギ

レルメ・アルメイダ氏の俳句会見学あり、

同氏から「若さ」と云う題で次の如き

意味の詩を作ったが之を俳句にしたら如何と云う御注文があった。

新屋の 赤い屋根に燕が巣を作って巣

立った

圭石

赤屋根や燕巣立つ朝にして

芭川

新開地燕巣立つや屋根赤き

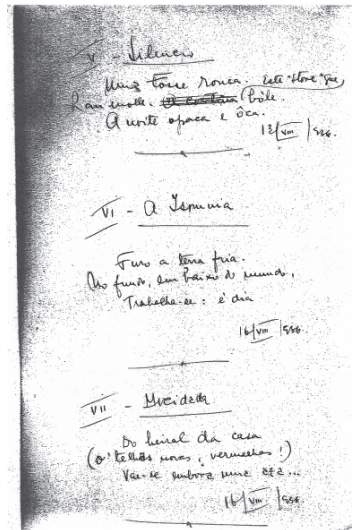
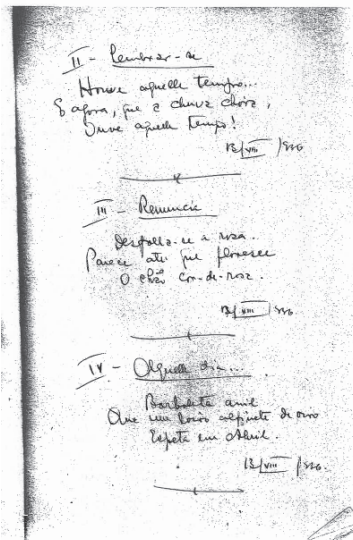
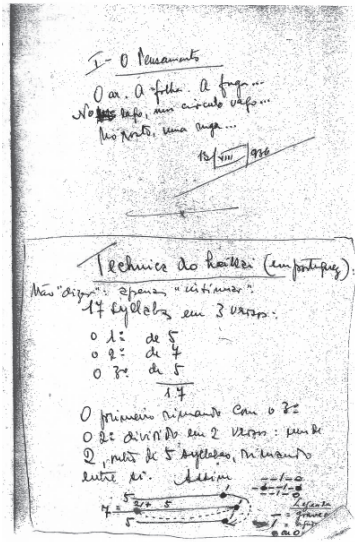
暁雪

燕の巣立つ朝なり屋根赤し

素骨

新屋の赤屋根後に若つばめ

資料II アウメイダの直筆日付入りハイカイ原稿 (1936年8月13日~16日)



資料Ⅲ アウメイダが句会参加後、市毛夫人に宛てた手紙の下書き
(Barros ほか (2010) からの引用)

Madame,

A sua carta, assim como os livros e os artigos que teve a bondade de me mandar, foram para mim uma honra e um prazer tão grande que eu nem sei como lhe agradecer devidamente.

Toda essa preciosa documentação sobre a poesia japonesa, chegou a mim justamente no momento em que me entrego de corpo e alma à tarefa, aliás, muito do meu agrado, de “haikaizar” (permita-me o neologismo!) a poesia portuguesa. Avalie, portanto, prezada Madame, quanto a minha obra lhe será devedora, se algum dia eu conseguir levá-la a termo!

Estou ainda sob o encantamento daquela reunião da última quarta-feira, no Clube Japonês, à qual fui apresentado pela gentileza do seu marido.

Minhas impressões pessoais a respeito desse “Jogo Floral” serão o assunto de um artigo que publicarei no O Estado de S. Paulo, e que terei o prazer de lhe enviar.

Mr. Itigé me pediu uma pequena lista de alguns escritores e pintores brasileiros para a recepção que o Consulado oferecerá em honra dos representantes japoneses no Congresso do P.E.N. Club, e eu tomo a liberdade de anexá-la a esta carta pedindo-lhe que a entregue ao seu marido.

Agradecendo-lhe mais uma vez por tanta gentileza, sou, Madame, com minhas homenagens mais afetuosas, seu criado devotado.

マダム

貴女のお手紙、またご親切に送ってくださった本や記事は私にとってとても光栄なことで、嬉しくて、感謝の言葉もありません。

日本の詩についての貴重な資料は、ちょうど私が全身全霊でポルトガル語の詩を「ハイカイ化」(新語を失礼!)しようとする楽しい作業に取り組むときに届きました。もし私がこの作業を完了できたあかつきには、私の作品はマダム、貴女に大きな借りがあるということの意味します。

私は夫君のご親切で紹介していただき去る水曜日に参加した日本クラブでの句会の感動からまだ覚めていません。

「花ゲーム」の個人的な印象は今後『エスタード』紙の記事に記すつもりですので、記事をお送り致します。

総領事館主催で開催されるPENクラブの日本代表歓迎パーティに招待するブラジルの作家や画家のリストを市毛氏に依頼されましたので、この手紙に添付致します。夫君にお渡しください。

再度貴女のご親切に感謝致します、マダム。忠実なる僕より親愛なる敬意をこめて。